

活に一層適合的な知識・理論・技術体系である『シンプルライフ』スタイルの構築・確立をはかる事業を行う。また『シンプルライフ』スタイルの国内外一般への教育・交流・提言事業を展開しつつ、…中略…生活の充足度を維持し、健康増進をはかり、省エネルギー・省資源を達成させ…中略…広く全体の利益の増進に貢献することを目的とする』という。つまり、「シンプルライフ」スタイル研究・構築を前段とし、後段は「シンプルライフ」スタイル普及という二段階の目標設定にあて、宗教的（あるいは仏教的）要素は、「古今・東西の人文・社会思想あるいは流行等にあらわれた『簡素な生活』様式」の中へ括り込む形に整えられている。要は、活動の一つが「簡素な生活様式探求」であり、各宗教の倫理観や教義は背景として扱われ、述語そのままの引用は極力避けられる形だったと理解できる。

二 前身としての「地球文明シンポジウム二〇〇〇」

この方針は、技術者出身の個性的な一僧侶が創めたシンポジウム活動に基づく。当該団体の前身は「地球文明シンポジウム二〇〇〇」（主宰：内藤歆風「日蓮宗」）であり、二〇〇〇（平成十二）年六月の第一回豊かさシンポジウムでは「充足革命への提言」を謳って次のように言う。「二〇世紀を支配する市場経済システムは、『欲望』『所有』『個』をキーワードに発展し、その結果今日の地球環境問題の根本原因である資源多消費の構造を生み出した。この市場経済システムの機会費用として出現してきたのが、『豊かさ』と幸福感の乖離と価値観の欠落』『公共の場の喪失』『時間消費に伴う家族・地域社会の崩壊』である。今日の持続不可能な社会・経済システムは、地球環境を破壊す

る前に、人類が築き上げた社会システム自体を破滅へと導きかねない。社会システムとしての迅速な対応を行わない限り、テクノロジーを中心とする環境効率革命だけでは二一世紀の人類に未来はない」。この観点を活かすアクションプログラム実現のため、当該団体の設立に至ったものである。

三 法人認証後のシンプルライフ普及センターの活動

運動（啓発）型NPOとして設立後八年で三十四回のイベントを開催した。内訳は、土曜学校シンプルライフ講座（通例の学習会／年二～四回開催）をこれまでに二十二回。生活文化講演会（特例の講演会／年一回）を八回。市民大学講座（伊東市の委託事業）一回。五周年記念シンポジウム一回。内部学習会を二回。他機関・他団体に事業協力（ライフスタイルフォーラムほか）多数。なお土曜学校・生活文化講演会の学習テーマについて付言すれば、環境科学など網羅・理念的な初期のものから、老化・健康など個別・具体的話題へと遷移している。

現代日本の大学生のモノ供養観

隈元正樹

我が国では、ヒトに限らず、動植物や、無生物（モノ）にまで、生命や意識の存在を認め、それを畏れ、供養してきた伝統がある。人形供養、針供養、筆供養などはその代表的なものである。近年でも、それは廃れるどころか、パソコン供養やテレホンカード供養にいたるまで、次々と新たな対象を加えてお

り、全国の社寺では、モノ供養・感謝祭が盛んに行われている。現代それは、環境問題との関連でも注目されるようになった。本発表では、現代の若者(大学生)の基底的霊性(各宗教団体への所属や自覚的信仰の有無・相違に関わらず、広く共有された宗教的感性)を把握することを目的としておこなった質問紙調査結果をもとに、現代に引き継がれる日本の霊性を明らかにし、さらに自然観との関連を分析することを課題とする。

質問紙は、モノの種類(十二種)ごとにモノ供養をすべきかどうか、すべきとすれば、その理由は何かをたずねた。自然観としては、自然の美しさに「神々しさ」を感じるかどうか、天災に直面して「いましめ」のようなものを感じるかどうかをたずねた。それぞれを個別に集計した上、モノ供養と自然観をクロス集計することによって、両者の関連を明らかにしようとした。調査対象者は、東洋大学の大学生であり、統計的サンプリングは行えなかった。またサンプル数の関係で、統計的有意差検定は適切に行えなかった。したがって本調査の結果によって一般的な命題を導くのは限界があるが、このような調査は、管見の限り、これまでなかったため、以後の研究に先鞭をつけるという意味で、一定の価値があるものと考え(本調査の設計にあたっては西山茂氏に負うところが大きい)。

まず、調査を企画するにあたって、モノ供養の四大動機(畏聖・恐怨・礼別・習慣)を想定した。その上で、モノの種類・性質ごとに、異なる動機が導き出されるのではないかというのが仮説①であった。そして、自然観との関連では、「神々しさ」「いましめ」を感じるグループは感じないグループより、モノ

供養に積極的ではないか、というのが仮説②、「神々しさ」「いましめ」を感じるグループは、畏聖・恐怨が中心、感じないグループは礼別・習慣が中心となるのではないか、というのが仮説③であった。

調査の結果、仮説①については、礼拝物では神仏への畏れ・畏聖、抵当品では念(思い)がタタル・恐怨、身の回り品・仕事道具ではお礼やお別れの気持ち・礼別というように、大部分検証されたが、縁起物供養の理由では、当初想定していた習慣がそれほど顕著ではなかった。調査対象者が首都圏出身の学生であったという制約が、何らかの影響を与えた可能性も考えられよう。首都圏では、環境への配慮からお焚き上げなどは自由には行えないからである。仮説②に関しては、「神々しさ」や「いましめ」を感じるグループの方が、感じないグループより、モノ供養をすべきと答え、評価していたことから、検証されたと考えてよい。仮説③に関しては、一般的なモノ供養の理由をたずねた質問では、たしかに仮説のような結果となったが、個別のモノ供養の理由と自然観との関連は、必ずしも明らかにならなかった。以上が本研究の結論である。

今後の課題として、伝統的なモノ供養観と類似の心性が現代の学生に見られたことから、直ちに基底的霊性が引き継がれていると考えてよいかという問題がある。昨今のテレビを中心としたメディア・スピリチュアリティの影響も考慮する必要がある。さらに世代間比較や、諸外国との比較を通じて、現代的なもの、日本的なものを明らかにしていくことも、重要な研究課題であろう。